註

（1）一九七六年、京都人文科学研究所刊。
（2）一九九二年、吉川弘文館刊。
（3）一九九五年、吉川弘文館刊。
（4）『周礼』考工記、匠人。
（5）『中国古代的人牲人殉』（一九九〇年、文物出版刊）。
（6）「論〝婦好〟墓的年代及有関問題」（『文物』一九七七年、十一期）。
（7）「殷代的交通工具和駅伝制度」（『東北人民大学人文科学学報』一九五五年、二期）。

趙中男総策劃
明代帝王系列伝記　十一冊

山根　幸夫

ここ数年来、中国では明・清の皇帝伝記が相次いで刊行されている。まず、明の皇帝伝から挙げると、陳梧桐『洪武皇帝大伝』（河南人民出版社、一九九三）、商伝『永楽皇帝』（北京出版社、一九八九）、昇中辰『明成祖伝』（人民出版社、一九九三）、毛佩琦・李焯然『明成祖史論』（文津出版社、一九九四）、何宝善・韓啓華・何滌尖『万暦皇帝朱翊鈞』（北京燕山出版社、一九九〇）、樊樹志『万暦伝』（人民出版社、一九九三）等がある。清の皇帝伝にも、孫文良・李治亭『天聡汗崇徳帝』（吉林文史出版社、一九九三）、白新良主編『康熙皇帝全伝』（学苑出版社、一九九四）、白新良『乾隆伝』（遼寧教育出版社、一九九〇）、唐文基・羅慶泗『乾隆伝』（人民出版社、一九九四）等の諸著がある。まさに皇帝伝の花盛りとでも云うべきであろうか。更に、最近『清帝列伝』シリーズが吉林文史出版社より刊行された。

清帝列伝の向うを張って、明皇帝伝記シリーズ十一冊が、遼寧教育出版社より刊行された。その内容を表示すれば左の如くである。

呂景琳　洪武皇帝大伝　五一九頁　一九九四・八
毛佩琦　永楽皇帝大伝　四八三頁　一九九四・八
趙中男　宣徳皇帝大伝　三九〇頁　一九九四・八
趙毅・羅冬陽　正統皇帝大伝　三八七頁　一九九三・一二
方志遠　成化皇帝大伝　三八〇頁　一九九四・八
郭厚安　弘治皇帝大伝　二九六頁　一九九四・八
李　洵　正徳皇帝大伝　三〇三頁　一九九三・一二
林延清　嘉靖皇帝大伝　三五二頁　一九九三・一二
曹国慶　万暦皇帝大伝　四五五頁　一九九四・八
林金寿・高寿仙　天啓皇帝大伝　四〇四頁　一九九三・一二
張徳信・潭天星　崇禎皇帝大伝　四八五頁　一九九三・一二

右表を見れば、直ちに気付くように、明代の皇帝の中で隆慶帝の伝記のみが欠けている。これは甚だ残念なことであるが、適当な執筆者に依頼して近く補刊されるようである。

本シリーズの編纂に当っては、韋慶遠・李洵両氏が顧問に就いており、編集委員には張顕清・張徳信・南炳文・趙中男四氏が当っている。趙中男氏は遼寧教育出版社の編輯でもあり、本シリーズの全体の企画・推進につとめた人物である。因みに、趙氏は東北師範大学の学部・大学院において李洵教授に師事した由である。

さて、本シリーズの第一巻『洪武皇帝大伝』の巻頭に掲げられた趙中男氏の「寫在書前」によれば、新中国になってからも、明史の研究はやや薄弱な領域であった。その原因は色々あろうが、研究対象も朱元璋・李自成の領導した農民戦争をはじめ、鄭和下西洋・戚継光の抗倭戦争・資本主義の萌芽など限られたテーマに集中し、明代社会の発展・変化を体系的に研究したものは乏しく、明代の皇帝に関する研究もきわめて少なかった。「文化大革命の収束以後、数多の歴史領域の研究工作が空前の発展を示した（例えば清史の如し）。然し、明史研究は依然として清史との差が大きく、相対的に遅れている。……明史にも研究しなければならぬ問題は数多く、研究・写作すべきテーマも多々あるが、現在各出版社は必ず広大な読者の社会需要を考え、出版される原稿の経済効果を考える。どのようなテーマを選定すれば、明史研究に有利であろうか、又広大な読者の社会需要を満足させることができるであろうか。私が色々考えてみるのに、帝王の伝記はどうだろうか。帝王

は平民・百姓と異なり、その活動は時代・国家・王朝の命運と密接に結びついており、中国古代のように〈人治〉を主とする社会にあっては、皇帝の活動は特殊な歴史的意義を有している。但し、皇帝も人間であるから、人間としての特性も有するが、ただその社会環境と遺伝因素が皇帝をして、常人とは異なる人格たらしめ、彼をして自己の舞台上で数々の生々した豊富な人生劇を演ぜしめる。これらの皇帝の伝記を写出すれば、読者に一連の興味ぶかい好書を提供できるのではなかろうか。もし本シリーズが成熟していなければ、明史研究者たちにその欠点を捜してもらい、明史研究の発展をはかることができるかも知れない」と。以下、本シリーズの具体的成果について検討してみたい。

本シリーズ十一冊の中、五冊は一九九三年一二月に刊行され、残りの六冊は九四年八月に出版された。前述した如く、『隆慶皇帝大伝』が刊行されて、本シリーズは完結するわけである。趙中男氏によれば、従来中国人の多くは清代の皇帝の事跡については比較的よく知っていたが、明の皇帝については殆ど知らなかった。その上、明史研究の専著も多くはなく、僅かに呉晗『朱元璋伝』、黄仁宇『万暦十五年』、朱東潤『張居正大伝』、王春瑜『明代的宦官和宮廷』等の相当水準の高い著作もあるから、明皇帝シリーズの執筆に際しては、好い参考書になるであろうと述べている。更に、趙氏は本シリーズ編纂の基本方針を次の三点にまとめている。

(1) 開放思想に基づき、各皇帝を描く際には従来の旧式理論の束縛を打破し、全十一冊に就いて必ずしも統一を求めず、各著者の理論水準と芸術才能を発揮させる。

(2) 伝記であるから、人物叙述を中心とし、各皇帝の思想上・活動上の時代的特徴を写出するが、各人の人間性・封建環境・社会制度間の矛盾・衝突をも描き出し、各皇帝を当時の社会背景の中に浮び上らせる。個々の皇帝の在位時期の簡単な歴史に止まらず、時代との関係のない皇帝個人の歴史とはしない。

(3) 本シリーズの用語は、つとめて平易を旨とし、嫌らしい評論や文書的な説教用語を避け、長たらしい史料の引用を避けて、広大な読者に読み易いものとする。

因みに、最近の中国出版業界では、専門書の出版部数を極力抑制しており、一千部前後に抑えられていることが多いが、本シリーズは各冊一万部を印刷している。本シリーズの編纂者や遼寧教育出版社の意気ごみがよくわかる。是非、本シリーズが中国の多数の読者に読まれることを期待してやまない。

さて、本シリーズ十一冊のすべてについて紹介・批評することは、スペースの関係からいっても到底不可能であ

る。筆者は興味を抱いた若干冊を紹介してみたい。まず呂景琳『洪武皇帝大伝』から始めたい。洪武帝については、既に呉晗『朱元璋伝』があり、わが国でも谷口規矩雄『朱元璋』（人物往来社、一九六六）、檀上寛『明の太祖朱元璋』（白帝社、一九九四）の両書がある。本書は「茫々苦海一浮沤」「倒海翻江、嶄露頭角」「天塹一躍、魚龍変化」「長江三蛟的生死搏斗」「皇帝輪流做、今到牧児家」「創建一個理想的小農社会」「創建一個勤政廉潔政府的努力」「士大夫們的栄与辱」「皇帝与丞相」「将帥之死」「皇帝和他的妻子児女」の十一章より成る。いずれも文学的なタイトルを付けていることに注目して頂きたい。これは十一冊すべてに当てはまる特徴である。

第一章から五章までは、洪武帝が明朝政権を樹立するまでの経緯を述べ、第六～十章では、彼の皇帝としての統治政策を論じ、第十一章で彼の妻子など家庭のことを語っている。前半五章で、洪武帝がどのようにして政権を掌握し、明王朝を樹立したかの過程を述べ、後半五章で、彼が皇帝に即位してからの統治政策を論じている。著者は洪武帝の政策は小農を中心とする社会を建設することを目指したもので、廉潔な政治を行うことに努めた、堯舜禹三代の盛世に向って歩んでいこうとしたという。第八章では、洪武帝が賢士大夫と共に天下を統治しようとしたが、同時に彼の読書人に対する猜忌心が深く、文字の獄を惹起した。殊に、江浙一帯の文化人に対して、特別に警戒心を注いだ。一方で文化人を用いて理想的政治を目指しながら、他方では文化人を厳しく鎮圧したことを指摘する。

第九章では、皇帝と丞相との関係について論じ、洪武帝は極力宰相の権限を抑制しようと謀り、結局洪武十三年の「胡惟庸の獄」が起り、中書省を廃止して、宰相のポストを除いたことを述べる。更に第十章では、建国の功臣であった将帥たちが次々に抹殺されていく過程を論じ、「藍玉の獄」に及んでいる。これらの洪武帝の恐怖政治については、既に多くの学者が論じているが、本書ではその過程を詳細に解明している。洪武帝によって誅殺された功臣が多数いた反面、沐英・湯和・郭氏三兄弟のように身家を保全した者もあった。最後の第十一章では、いわば洪武帝の個人的な面、即ち后妃やその児女について述べている。全体として見れば、洪武帝が帝位に即くまでの過程を述べた部分がやや詳しすぎる嫌いはあるが、全体としてよくバランスがとれており、洪武帝の全貌を浮びあがらせることに成功していると言えよう。

第一巻が依拠している資料は、『明実録』『国榷』『明史』『国朝献徴録』の如き基本史料をよく利用している。趙中男氏も指摘していたように、これらの史料を長々と引用す

る愚を避け、仮令引用するとしても、是非必要な一部分に止め、読者にとっても読み易いものになっている。洪武帝の伝記と云うに止まらず、明初の史実を認識するためにも、貴重な文献となっている。又、冒頭に掲げられた二葉の朱元璋像をはじめ、馬皇后・李善長・徐達・常遇春・劉基・宋濂・沐英らの図像も、極めて興味ぶかいもので、読者を楽しませてくれるであろう。

次に、毛珮琦『永楽皇帝大伝』に論及してみたい。毛氏は前述したように、李焯然氏と共著で『明成祖史論』を発表している。同書では毛氏が「内政篇」「民族篇」「外交篇」を分担し、李氏が「思想篇」「宗教篇」を担当している。同書は必ずしも伝記というよりも、「史論」の形式を採っている。他方、本巻の上篇は「通往帝座之路」で、「驍勇的燕王」「百折不撓」の二章より成り、下篇「一代雄王」は「開成与守成之間」「逆命者必殲除之」「欲遠方万国無不臣服」の三章より成っている。上篇では永楽帝の出生から、靖難の役で建文帝を仆して、南京城を攻略し、建文帝に与した「奸臣」たちを徹底的に処断したことを述べている。後半では、永楽帝が帝位に即いた後の永楽体制がどのように基盤固めを進めたかを論じている。永楽帝は統治の基本方針として儒家政治理想を標榜、「敬天法祖」「保民如赤子」「制礼作楽明刑弼教」「養士択賢聴諫納言」の四項に分けて叙述し、次節では「賢君？暴君？」と題して、永楽帝は儒教的理想を掲げてはいたが、果して彼が賢君であったか否かを問題にする。又、永楽帝が特務政治（錦衣衛）を行ない、恐怖政治を断行したことも指摘している。更に彼は宦官を重用して、明代政治の混乱の基を招いたことも、厳しく批判している。

第四章の最後の部分では「五出漠北、三犂虜庭」「内遷大寧都司」「遷都北京」の各節を立てているが、これらは第五章の「郡県交阯」「鄭和下西洋」等の節と併せて、永楽帝の対外発展として論じても好かったのではなかろうか。

余篇「魂断榆木川」では、毛氏は永楽帝の個人的な面に論及し、徐后（徐達の娘）が『内訓』や『勧善書』を編したことも述べているが、永楽帝の内廷はすこぶる頽廃していたようで、毛氏も彼の晩年は「荒淫で、豪も収斂なし」と断じている。

尚、毛氏が本巻を執筆した史料は、第一巻と同じく『明実録』『明史』『国榷』『明史紀事本末』などが中心であるが、毛氏はこれらの史料をしばしば長々と引用している。歴史を専攻する者にとっては便利であるかも知れないが一般読者にとっては、かなり迷惑ではないかと思われる。

次には、明朝歴代の皇帝の中でも最も悪虐非道な皇帝と

されてきた正徳帝を扱った、李洵『正徳皇帝大伝』について考察してみたい。李洵教授が正徳帝をどのように取り扱っているか、私にとってはきわめて興味ある問題であった。本巻は一〇章より構成され、「明代的中国―社会与王朝的歴史」「正徳天子的誕生和生母之謎」「少年天子酔心于嬉戯生活、不料有両種勢力在争奪他」「朱厚照離開乾清宮住進豹房、他在搞独特的豹房政治」「朱厚照的西北遠征、同蒙古人打了一杖」「朱厚照寵信宦官、但他又殺了最大的宦官劉瑾」「宸濠之変、朱厚照借機下江南」「正徳朝的起義者」「朱厚照之死」「朱厚照与明代貴族大地主階級」というタイトルになっており、これによってもわかるように、李教授は正徳帝個人について述べると同時に、正徳年間の社会・経済についても、重要な問題についてよく論及している。例えば、宦官の問題、寧王宸濠の反乱、流民起義や劉六・劉七の反乱、そして最後に明代貴族大地主階級の問題を採りあげており、正徳年間における重要な事項はすべて網羅されている。三〇〇頁にまとめられた、誠に要領を得た叙述であると言えよう。

最後に、明朝最後の皇帝崇禎帝を扱った張徳信・譚天星『崇禎皇帝大伝』を採りあげてみたい。本巻は七章より構成され、「従信王到皇帝」「中興之夢」「現実与理想的矛盾和衝突」「両大擾患与対策（上）―皇太極南侵与朱由検的自救」「両大擾患与対策（下）―李自成入京与朱由検自縊」「朱由検的家庭生活与信仰」「一個逝去的影子、後崇禎時代」となっている。殊に、著者は第二章に重点をおいたようで、「危機四伏的局勢与抉擇」「智除魏忠賢」「不凡的構想与努力」「短命的東林党内閣」「科技文化的進歩与発展」の五節より成っている。

第二章では崇禎帝の治世を語るだけでなく、明朝の体制建て直しをはかった彼の努力の迹をたどることができる。又、宣教師が来華し、西洋の科学技術文明が中国に伝播したことにも論及している。勿論、『崇禎暦書』の編纂や火器の採用にもふれ、崇禎時代は「西方科学が中国に伝入し、機械・物理・測絵・暦算など、その内容は様々であった」としている。徐光啓の『農政全書』、熊三拔の『泰西水法』等の技術書に就いても述べ、崇禎帝は徐光啓の学識をきわめて賞揚し、彼が病気になった時にはわざわざ内使を遣わし、見舞の品物を下賜したことも述べている。更に、宋應星の『天工開物』、利瑪竇の『山海輿地全図』、徐霞客の『遊記』にまで及んでいる。

然し、崇禎年間における最大の問題点は、女直族の侵略と、李自成を中心とする農民反乱の拡大であった。この両大事件を論じているのが第四章と第五章である。第四章では、皇太極の南侵と、それに対抗する崇禎帝の自救策を論

じ、「後金的建立与南進受挫」「皇太極的進撃与朱由検的自救」の二節に分けている。第五章は李自成の北京侵入と朱由検の自縊について論じ、「剿与撫的躑躅」「李自成的発展与朱由検的煩悩」「楊嗣昌的啓用与賭局」「魂帰煤山」の四節に分け、崇禎帝の煤山における死までを描いている。而して第四節の「魂帰煤山」では、「頻煥主将、鏖戦中原」「兵敗如山倒」「紫禁城内的哀歌」といった、頗る文学的なタイトルを用いている。勿論、農民反乱それ自体を詳述するのではなく、専ら崇禎帝との関わりに於て論及しているわけである。

周知のように、崇禎帝には実録はないから、本巻で主として使用されている史料は、『国榷』『明史』『明史紀事本末』であり、他に『崇禎長編』や『烈皇小識』『資治通鑑綱目三編』等もかなり用いられている。それにしても、『明実録』のような信頼して使用できる史料のないために、執筆者も苦労したことであろう。然し、全体的にみて、明朝最後のこの時期をうまくバランスをとって叙述していると言えよう。第六章では、崇禎帝の家庭生活を中心に述べ、第七章では、清朝の入関と南明王朝の抗清運動に及んでいる。巻末には「崇禎朝内閣閣臣簡表」及び「伝略」が付録されていて、便利である。

以上、十一皇帝伝の中、四皇帝伝を紹介したにすぎない。然し、以上の紹介によっても、本シリーズの内容を想像して頂けるのではないかと思う。各巻の著者には、老大家もあれば、中堅・若手の研究者もあり、それぞれに特色を出している。趙中男氏も述べているように、皇帝の伝記は、単にその個人を描くのみでなく、その時代を描出することが何よりも重要である。最初に述べたように、明代の皇帝伝記も個別のものはあったが、本シリーズのように、明代の全皇帝（隆慶帝の伝記は未刊）がシリーズとして刊行されたことは、非常に重要である。全巻を通じて読了することによって、明一代の歴史の展開を把握することができる。読者に対して、明代史に親しみをもたせる、きわめて有効な企画である。それは、吉林文史出版社より刊行された『清帝列伝』シリーズについても、同様のことが言えるであろう。

因に、本書には精装と平装の両者があるが、双方とも「明帝出警図」を印刷したカバーを付しており、そこには明帝狩獵、出游などの図がカラーで印刷されている。全体をつなげば一巻の絵巻になるように配慮されているらしい。最後に一言つけ加えれば、本シリーズの企画・推進者である趙中男氏の手になる「明代帝王系列伝記評介」と題する紹介文が『明代史研究』二三号（一九九五・四）に掲載されている。この紹介文も参照して頂ければ幸甚である。